

|         |                  |
|---------|------------------|
| 氏名(本籍)  | 谷川多佳子(東京都)       |
| 学位の種類   | 博士(文学)           |
| 学位記番号   | 博乙第848号          |
| 学位授与年月日 | 平成5年3月25日        |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当     |
| 審査研究科   | 哲学・思想研究科         |
| 学位論文題目  | デカルト研究——理性の境界と周縁 |
| 主査      | 筑波大学教授 文学博士 工藤喜作 |
| 副査      | 筑波大学教授 文学博士 廣川洋一 |
| 副査      | 筑波大学教授 文学博士 藤田晋吾 |
| 副査      | 筑波大学教授 野町啓       |
| 副査      | 筑波大学教授 花輪光       |

## 論文の要旨

本論文はデカルトの理性を再検討し、その境界領域や周縁部を明らかにすることを目指している。全体は三部に分かれ、第1部で著者は若きデカルトの思想形式に焦点をあて、デカルトが当時の学問や思想からいかなる影響をうけ、そして彼独自のものを打ち出すにいたったかを考察する。第II部においてはデカルトの理性の体系の限界と境界が論じられ、そのうちに見られる曖昧さを追求し、それらが無限、二元論、心身結合の諸問題に集約されることが指摘される。第III部はデカルトの体系において中間的位置を占める想像力と言語の問題に焦点をあて、これらをめぐる当時の考え方と彼との関係を論じる。

### 第I部 生成

第1章「若きデカルトの彷徨——『思索私記』周辺」において著者は先ずデカルトの遺したノート『思索私記』を中心に当時の百科全書思想や記憶術との関連を探る。そしてこれらの思想とさらにF. ベイコンの学問構造、スペインのホアン・ウアルテの考え方も関連して、デカルトの学問形成の意欲がこれらの人たちと異なるのは、初歩的であるが数学をモデルにした点にあると指摘する。またデカルトは当時の自然魔術や薔薇十字とも関係していたが、彼は魔術的学問と決別し、新しい学問の建設に向った。この際大きな役割を果たしたのが数学であり、この点において彼は同じ方向に行く先人ベイコンと異なっていたことを明らかにする。

第2章「デカルト哲学の形成——『規則論』をめぐる」において著者は『規則論』に拠って、デカルトの「普遍数学」の構想を取り上げる。これは「秩序」と「計量的尺度」に関する普遍的な学

であり、代数学を幾何学に適用することによって、科学的な学問理論の型を示したばかりでなく、「方法」によって諸学を統一する「普遍学」の構想にいたる所以を明らかにする。さらに著者は Scientia (学問, 知) や Experientia (経験, 実験) などがスコラ的な意味とは根本的に異なり、演繹の基礎としての「単純本性」もペイコンとは異なる独自の意味をもち、これが直観 (intuitus) において決定的となることを指摘する。

## 第II部 体系——構造と境界

第3章「理性の連鎖と無限」において著者はデカルトの懐疑の意義と「思惟する自我」を問題とする。著者によれば懐疑は欠如の経験であり、それはまた「自我」の有限性の経験でもある。懐疑によって方法的に確立されるものは自我、神、世界の三つである。Cogitoの直観は伝統的な直観と異なり、「自我のうち」にある観念にあてられ、やがてそれは「無限」の問題に直面する。彼の場合真に無限なるものは神のみであり、数や世界は無際限なものと思なされる。デカルトが他の近代哲学者マルブラシュやライプニッツと対照的であるのは、存在の両義性の観念の立場に立っていることである。そしてこの立場の根底に永遠真理創造説のあることが明らかにされる。

第4章「二元論の曖昧さ」は、先ずデカルトの二元論に基づく体系の樹立が当時の哲学者、ホッブズ、アルノー、ガッサンディなどによって問題とされ、種々な異論がとなえられたことを明らかにする。次いで「拡がり」の概念には幾何学的な拡がり (extensio) と自然学的拡がり (extensum) の意味があるが、両者にはずれがあること、またこれと関連して「運動」の概念を究明し、これにも自然学と形而上学との間にずれが見られることを指摘し、通説の打破につとめている。

第5章「心身の結合」においては、デカルトが二元論に基づく機械論により、動物の身体を機械と思なしたが、人間の身体についても機械や道具類をモデルとした機械と思なされたことが論じられる。だが動物と人間の間には差異があり、その差異は人間が、「精神」をもつことにある。人間に特有な思惟にも曖昧な点が見られる。つまり、思惟と身体諸器官との関連ならびに心身の結合についての難点が指摘される。心身問題を自然学的に取り扱うことには難があり、心身とは異なる第三の次元の因果性をたてる必要があり、これが「自然」さらには神の創造にまでつらなることを明らかにした。

## 第四部 想像力、言語——二元論の間

第6章「想像力——身体と精神のあいだで」において著者は想像力を問題とする。著者によればデカルトの想像力は身体的記憶に結びついているが、彼は当時の記憶や想像力理論を受け入れながら、独自のものを形成していることが明らかにされる。当時の想像力理論は想像力を身体的、物理的な力と思なし、それが奇跡や異常な出来事の説明に役立てていたが、デカルトの場合想像力によって小犬の像や母斑の問題、胎児に対する母親の影響を説明している。著者はそれらが機械論的に説明されることにデカルトの特色があったと主張する。

次に、著者はデカルトの想像力が時期において意味の変遷があったことを指摘する。『規則論』の段階では認識能力として大きな役割を果たしたが、『省察』の段階になると不完全な認識に結びついたものとされ、形而上学から完全に追放された。著者はこの意味の変遷がデカルト哲学の発展に関

わりがあったと指摘する。

第七章「言語——二元性と普遍言語」において著者はデカルトにおける言語の問題を扱う。それによれば言語（記号）は外的に人間の思考を表す唯一のものである。しかし言語は精神そのものではなく、音声や文字という物質性をもち、その二元性からさまざまな問題が生じる。言語への不安は『規則論』において示され、『世界論』や『方法序説』においては理性が言語から独立したものであることが強調される。理性の側の観念・意味と物質の側の言葉・文字・各国語との結びつきは、人為的・恣意的・制度的なものでしかない。このような二元性により、言語は誤りとも結びつき、言語と区別される直観のみが真理につながることが明らかにされる。

以上のような言語観から当時の普遍言語創出の問題は否定的にとらえられる。言語を「精神の最良の鏡」と定義し、普遍記号・普遍エクリチュールへの構想をいだくライブニッツはこのデカルトの普遍言語批判を検討することから始まったことが指摘される。

## 審 査 の 要 旨

本論文は著者が1979年パリ大学に提出した学位論文以後の研究成果である。

著者は第I部において日本の石井、田中両氏の研究を踏まえて、デカルトの思想形成における魔術や薔薇十字との関連を整理した点、そして今まで論じられることの少なかったF. ペイコンとの関係について立ち入った研究をなしたことが評価される。『規則論』に焦点をおいた第2章における普遍学の構想において、「単純本性」がペイコンと異なる点を明確にした点も評価できる。

第II部において著者はフランスのデカルト研究の二大潮流、ゲルーの構造主義的研究とアルキエの実存主義的研究の間であって、デカルトのテキストの検討とその体系的な考察からデカルトの理性の限界と境界ならびに非理性を明確にした。また「拡がり」概念の批判的検討ならびに心身結合についてのデカルトの曖昧さを著者独自の仕方でも指摘した。

第III部において「想像力」と「言語」の問題を構造的な仕方ではなく、デカルト思想の時期的変遷の中でとらえたこと、またこの種の問題についての現在の表面的な理解の仕方に一石を投じている。

著者はデカルト研究の新しい方向性を打ち出しているにもかかわらず、不備な点がないわけではない。デカルト及びペイコン、ライブニッツ、さらにはヴァニーニやウアルテらのテキストを用い、それらの時代背景を詳細に検討したにもかかわらず、慎重すぎて、独自の見解を打ち出しえなかった憾みがある。また部分的にはデカルトの「直観」を現代の数学者ブラウアーの直観主義と比較した際、説明にやや不備な点が見られたのは惜まれる。

以上のような問題点があるとはいえ、本論文は内外の研究を踏まえた点でデカルト研究を新たに一步前進させたものであり、学界に貢献するところ少なくないと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。